

「他者」のナショナリズム

—夢野久作『ドグラ・マグラ』における精神病の表象—

李 珠姫

第一節 優生学のアレゴリー小説

夢野久作¹の長編『ドグラ・マグラ』²は、一九三五年一月に松柏館書店から刊行された探偵小説である。記憶を失くし精神病棟に収容された「私」が、自分の名前と過去の記憶を思い出すために実験を受ける話がこの物語の内容である。主人公の「私」＝呉一郎は、先祖の狂気が遺伝し、そのため殺人を犯したものとされている。この犯罪をきっかけに、九州帝国大学の医学者正木敬之と若林鏡太郎は、「私」を入院させ「心理遺伝」の治療を試みる。この作品の初版は、「幻魔怪奇探偵小説」という多少大げさな印象を与える肩書きを付けられており、「エロ・グロ・ナンセンス」³と形容される大衆消費文化の開幕時代の雰囲気を与えている。

この物語には、精神病を遺伝によるとする同時代の見解が投影されている。精神病と遺伝を結びつけるこのような認識は、優生学において精神病患者を劣性者と見なす根拠ともなった⁴。国家社会の構成体として生きるに相応しい生物学的形質を持つものと、そうでないものを規定し、後者を排除するかたちで種の改良を図ろうとした優生学。二〇世紀初頭、ナショナリズムの高揚とともに世界的に流行したこの文脈において、遺伝病を患うものは国民として望ましくない存在とされた⁵。とりわけ『ドグラ・マグラ』が発表された日本の一九三〇年代は、優生思想が大衆に広がり、断種法の導入といった制度化が議論されつつあった時期である⁶。呉一郎の家系を調べることで彼の狂気の原因を特定する二人の医学者は、一郎と彼の従妹モヨ子の親族結婚を阻止し、二人を病院に収容して遺伝治療を施す。このあらすじの展開は、優生学の構想をアレゴリー化したものであるといえよう。本研究は、このような時代的背景をふまえ、『ドグラ・マグラ』における精神病の表象分析をめざすものである。

『ドグラ・マグラ』は、精神病患者の「私」が自己の主観的経験を言語化した構成をとっている。この作品が、劣性欠陥者と見なされた精神病患者を主人公に立て、語り手の地位を与えていることは確実に意図的な設定であろう。本稿ではこの作品を、「非国民」の印を押されたものに声を与え、作者なりのナショナリズムを唱えたテ

クストとして捉える。その詳細を究めるために、夢野久作の探偵小説観を取り上げ、それが本テキストにどのように物語化されているかを考察する。

また、呉一郎の他者性は、正木の科学言説において彼の先祖が中国に由来するものとして説明されることで、より強調される。作品後半部に出てくる「僕はキチガヒかも知れませんが日本人です」（六七四頁）という一郎の台詞は、外部者の印を付けられたものによって語られているため、さらに複合的な意味合いを持つ。全ての情報が、自分を呉一郎として指していることに気づく「私」は、どんな反応をみせるのか。そこに秘められたナショナリズムを究明し、作者がその主題を具体化するために精神病者の他者性をどのように用いているかを批判的に検討する。

第二節 退化時代の反逆芸術—夢野久作の探偵小説観

『ドグラ・マグラ』には、この小説と同じ題の「ドグラ・マグラ」という原稿が登場する。記憶を取り戻させるために、若林が「私」を連れていく場所は、自殺した正木敬之の研究室である。精神医学の参考資料を陳列したこの部屋の戸棚には、「ドグラ・マグラ」という標題の付いた原稿の綴りが置いてある。若林は、それがこの病棟にいる若い大学生の患者が書き上げた創作で、「精神病者の心理状態の不可思議さを表現した珍奇な、面白い製作の一つ」（九〇頁）であると紹介する。

「私」の叙述をたよりにこの原稿の詳細を推察すれば、それがわれわれ読者が手にとって『ドグラ・マグラ』と同一の内容であることがわかる。この小道具の挿入は、作品全体がある精神病者の主観に基づいたものであるという暗示を与えてくれる。要するに『ドグラ・マグラ』は、いわゆる「精神病者の芸術」を装っているのである。

ここには、精神病者の創作に対する病理学的言説の影響が見て取れる。非凡な創造性、または天才性が、病理学的な認識体系のなかで捉えられるのは、一九世紀末のロンブローゾ⁷の『天才論 (*L'uomo di genio*)』⁸にまで遡るが、ここでは精神病者の製作品そのものを病の徴候として医学の対象に取り入れた試みとして、プリンツホルン⁹の研究と日本におけるその受容に注目したい。

一九二二年、ドイツの精神科医プリンツホルンは、手ずから集めた精神病者の創作物を紹介し、それを病理学の見地から分析した研究書『精神病者の芸術性 (*Bildnerie der Geisteskranken*)』¹⁰を出版した。『精神病者の芸術性』は、ほぼ同時期の日本にも紹介され、知識人の一部の関心を精神病者の芸術に向けさせる一つのきっかけとなった¹¹。一九三七年、精神科医の式場隆三郎¹²が『中央公論』に寄稿したルポルタージュ「二笑亭綺譚」もその一例である。

東京深川にあった家屋「二笑亭」は、渡辺金蔵なる人物が「精神分裂症 (Schizophrenie)」¹³の診断を受けるまでの十余年の間、建築工事を続けていたものである。話題を呼んでいたこの建築物を取材し、渡辺の病の経過を示すものとして描写した式場は、次のような文章を残している。「あれは決して原始的建築ではないが、そのモチーフにはわれらの祖先が原始時代にあつて、勝手な材料を選んで、好きな形に組み建てて住んだ気持ちに共通なものがある。」¹⁴ 建築の独創性を指摘するにあたり、決して原始的ではないと断わりながらも、敢えて原始性に言及している点は注目に値する。式場は、「誰の心にも存するものの強化であり、常人の心に潜む意欲の勇敢な発現」¹⁵として二笑亭を評価する。渡辺の建築を精神病の可視的症候として把握すると同時に、「正常人」の心の反射として称揚することを可能にしたのは、この「内なる原始人」という進化論に基づいた序列化の概念である。

さて、「不可思議」「珍奇」と形容される狂人の原稿「ドグラ・マグラ」もまた、簡単に退けることのできないある種の真実を物語っており、それが読者にして日頃の「正常」な感覚までを危うくするものとされている。若林は、「私」との会話で、「ドグラ・マグラ」の原稿について次のように説明する。

「少くとも専門家に取つては面白いと云ふ形容では追付かない位、深刻な興味を感じず内容らしいですねえ。専門家でなくとも精神病とか、脳髓とか云ふものについて、多少共に科学的な興味や、神秘的な趣味を持つている人々に取つては非常な魅力の対照になるらしいのです。現に当大学の専門家諸氏の中でも、これを読んだものは最小限、二三回は読み直させられてゐるようです。さうして、やつと全体の機構がわかると同時に、自分の脳髓が発狂しさうになつて居る事に気が付いたと云つております。(略)」

「へエ。何だかモノスゴイ話ですね。正気の間人がキチガヒに顔負けしたんですね。よつぽどキチガヒじみた事が書いて在るんですね」(九三—九四頁)

「正気の間人」を「顔負け」させる精神病者の言語。科学に代表される近代合理主義に、狂気の側から亀裂を入れること。それが、精神病者の呉一郎が「ドグラ・マグラ」をもって狙ったものであり、そんな呉一郎を主人公にかかげることで、夢野久作が意図した表現の効果であつたといえよう。この反正気、反科学を志向するデカダンスの姿勢は、作者の探偵小説観にも一貫してみられるものである。『ドグラ・マグラ』と同年に発表した「甲賀三郎に答う」で、久作は探偵小説の将来は「変格探偵小説」¹⁶にかかっていると主張し、次のように述べた。

[探偵小説は] あらゆる虚栄と虚飾に傲る功利道徳と科学文化の荘嚴……燦爛として眼を眩ます科学文化の外観を掻き破つて、そのドン底に萎縮し藻掻いてゐる小さな虫のやうな人間性……在るか無いかわからない超顕微鏡的な良心を絶大の恐怖、戦慄にまで曝露して行くその痛快味、深刻味、凄惨味を心ゆくまで玩味させるところの最も大衆的な読物でなければならぬ。¹⁷

この探偵小説観を、文明の衰滅に対する懸念として読むことも可能であろう。ただし、ここでいう「科学文化」は、西洋からの流入物であり、萎縮しつつある「良心」や「人間性」といった倫理的価値は、日本土着のものを意味していたことをつけ加えなければならない。たとえば久作は、「探偵小説の真使命」という文章で、明治維新以降「日本人の趣味」が「西洋文化の輸入」によって「低下」してきたと示しており¹⁸、この「低下」という言葉は、例の「甲賀三郎に答う」では「低級化」「退化」「動物化」などに表現をかえ繰り返されている¹⁹。久作の作品を、彼の探偵小説観を手がかりにして分析した複数の論考が共通して指摘しているのは、ここに垣間見られる文明観に潜んだナショナリズムである²⁰。

しかしながら、それと合わせて論じられるべきは、変格探偵小説の市民権を唱えるこれらの文章において、それが「趣味」の「低級化」によって浮上した文芸だと主張されている点である。久作によれば、探偵小説は、文明退化の産物であると同時に、「あらゆる種類の文芸の中から進化し生れた、より新しい、より深い、より痛い文芸」²¹である。

[探偵小説は] 一切の芸術の伝統精神と形式から離脱して、人間の心理を今一層深く、アケスケに抉り付け、分析し、劇薬化、毒薬化し、更に進んで原子化し、電子化までして行くために生れた芸術界の鬼ツ子である。芸術の守護神を冒瀆する事を専門とする反逆芸術である。²²（傍線は引用者）

夢野久作は、探偵小説を芸術の墮落を代表するものと評したうえで、そのジャンルのなかに身を置き、エロ・グロ・ナンセンスの描写に励んだ自らの創作行為を意識化している。久作にとって変格探偵小説を書くということは、自ら頹廢のラベルを採用し、「功利道徳」と「科学文化」を標榜する時代に批評を試みることにほかならなかったのである。そこに見受けられるのは、「毒をもって毒を制す」という、世紀転換期に流行した類似療法ホメオパシーの修辞である²³。エッセイ「探偵小説の正体」に、「探偵小説はヂフテリヤの血清に似てゐる。ヂフテリヤの血清をヂフテリヤ患者に注射するとステキに利く。百発百中と云つてもいい位おそろしい効果を以て、ヂフ

テリヤの病源体をヤツツケてしまふらしい」²⁴とあるのも、作者の文学的類似療法を表したものと見える。

退化の恐怖が表れた時代観と、そこから導出された医療行為に喩えられる文学論を前にして、当時の最新科学が作者に与えた影響を否定することは難しい。科学に対して久作が取る態度はアンビヴァレントである。彼自身、同時代のもっとも圧倒的な科学議論であった進化論のレトリックを使いながら、それを科学そのものの批判のために転用しているのである。この両義的姿勢が、『ドグラ・マグラ』においてはどのような形骸をとどめているか、次節以下でそれを検討する。

第三節 呉一郎の表象—犯罪者としての精神病患者

この作品は、精神病患者の犯罪というモチーフに、ストーリー展開の多くを頼っている。というのも、主人公呉一郎の身の上には、彼に関係する三つの犯罪事件を境に大きな変化が訪れるからである。精神病と犯罪の結びつきは、当時の読者にとって全く新しい事柄ではなかった。呉一郎にまつわる事件とは以下のものである。

第一は、誰かが一郎の母呉千世子を絞殺し、縊死したように見せかけた事件である。息子の一郎は事件当夜の現場にいた唯一の人物として、親殺しの容疑者となる。法医学者の若林は一郎の陳述鑑定に関わるが、千世子の殺害が一郎の夢中遊行による犯罪か、第三者が彼に麻酔をかけその間に犯した犯罪か、確かな証拠を掴めないまま捜査は終了する。嫌疑を逃れた呉一郎は、しかしこの事件をきっかけに医学者の監視領域に入ることとなる。

同時に千世子の死は、一郎が伯母の呉八代子とその娘モヨ子と一緒に暮らす契機となる。「忌むべき遺伝的素質」（四二〇頁）のため呉家が周辺社会から婚姻関係において忌避されていたという記述から、一郎が近親のモヨ子と婚礼を挙げることになったのも精神病に対する差別が関係していることが窺われる。

第二は、正木博士が結婚式を翌日に控える呉一郎に、死後の身体腐敗を段階別に描いた絵巻を見せ、潜在していた先祖の記憶を呼び起こした事件である。そこから暗示を受けた呉一郎は、モヨ子を絞殺しその姿を絵巻の空白に描き移そうとしたことで逮捕される。この第二の事件を理由として、最初の事件も呉一郎の犯した罪であると見なされる。二年の間に二人の女性を殺害した、危険な精神病患者であるという判断を下される呉一郎は、今度こそ精神病院に入れられ、新学説を試す被験者の役を担わされる。

福岡地方裁判所で行なわれる呉一郎の精神鑑定は、精神医学が司法から犯罪者の管理権限を委譲されることを象徴的に物語る場面である（四七二—四七六頁）。精

神病のため犯罪を犯したと診断された一郎は、自分の犯罪に対する法的責任から逃れるが、その代わりに「正常人」の社会生活からも排除されるのである。

日本において精神医学が司法鑑定に関与するのは一八八二年からのことだが、鑑定において精神医学の役割がより大きくなるのは新刑法が公布される一九〇七年以降のことである。新刑法に「心神喪失者の行為はこれを罰せず、心神耗弱者の行為はその刑を減刑す」という条項が明示され、狂気の度合いをより細かく判断することが要求されたのである。それまで医学界において高い地位を有してはいなかった精神医学は、自らの社会的必要を主張するために、司法制度の変化に積極的に乗り出した。この新刑法の成立前後から、狂気と犯罪は互いに密接な関係にあるという知的言説が精神医学者らによって活発に繰り広げられるようになる。犯罪者の中に精神病者が紛れているというこの主張は、危険な異常者が日常世界を堂々と歩いているという不安を掻き立てる。そして、このような主張が行き着くところは、精神の異常を正確に見分けることができるのは専門的訓練を経た精神医学者のみであるという結論である。かかる言説の媒介を通して、精神医学は特定病気のカテゴリーに属する人々を社会悪の根源として示すと同時に、治療と監禁の手段をもって、法を犯してはいるが罪は問えないこれらの人々から社会を保護する役を自任することができた²⁵。

狂気を社会悪として語る知的言説は、一九二〇年代以降も優生学を通じて再生産される。遺伝に原因があると見なされる精神病をより効果的に統制するには、血統の根絶こそが根本的対策であると論じられたのである。たとえば、名古屋医科大学の教授杉田直樹²⁶は、精神病と犯罪性の関係を優生学の観点から概説した著書『優生学と犯罪及精神病』において、常習性犯罪者を「病的不道德症」「生来性性格異常」と規定し、「道義的情操が発達しない為に、其の原始的本能に基く反社会的行動をば、平然と、然かも殆んど常に行つて（略）訓戒や懲罰を加へても少しも反省する事がなく、却つて社会に対する反抗心を強めて行く如き傾向があるもの」²⁷と述べている。そのうえで杉田は、その矯正不可能性を根拠に、隔離と監禁、のみならず結婚の禁止と断種手術という解決案を出している。

精神病者も犯罪者も、共に遺伝学上から考察すると、何れも不良性の遺伝因子によつて、その病的特質を子孫に更に伝えて行く危険なる可能性を濃厚に所有してゐるものなることが確認せられた以上、優生学的見地から見て之等の不良なる遺伝因子を断絶することは、社会の進化改善上緊要なる事であらねばならぬ。²⁸

道徳の病と理解された精神病は、その原因を遺伝に帰せられることで、確かなる他者の境界の中に封鎖される。遺伝という生物学的決定論に基づき、一郎の「異常心理」を改造しようとする正木は、遺伝の管理を夢見る優生学者の姿に似ているといえよう。

ところで潜伏した狂気、すなわち、隠れた悪を強調する認識の傾向は、当時のメディアが犯罪事件を報道する際の口調と酷似している。メディアもそのような事件を、日常に潜む異常性または猟奇性が突出した出来事として扱っていた²⁹。それは『ドグラ・マグラ』にも再現されている。最後の第三の事件で、呉一郎は解放治療場にいた五人の患者に鍼を振る。この犯罪に続く一連の出来事は、新聞記事の直接挿入で提示される。記事は「狂少年鍼を揮つて/五名の男女を殺傷/治療場内一面の流血!!!」（七一七頁）「狂少年の自殺/平然たる正木博士」（七二〇頁）「狂人を模倣した/気味悪い屍体」（七二三頁）「奇怪な謎/狂少年の一語」（七二四頁）などの見出しを掲げ、いずれも奇怪と残酷、不可解さを強調している。若い精神病患者に睡っていた狂気とその残忍さを曝け出した惨状という、センセーショナルな事件として扱われているのである。

第四節 狂少年呉一郎の鼻

「私」に渡される正木博士の遺稿には、観相学の記述をパロディにした部分がある。解放治療場の全景をフィルム中継のように描写する場面で、呉一郎の顔をクローズアップに映し、観相学的に観察する箇所がそれである。周知のように観相学は、外見における特質を、その人の性格、さらには狂気をも識別できる指標と見做し、類型化を通じて観察法を精巧化したものである³⁰。弁士役をつとめる正木はこれを「骨相学」と呼んでいるが、記述の内容からすれば観相学により近いものと思われる。「人間の骨相」を「先祖代々の血統の縮図」（三一八頁）とみる正木博士がここで描出するのは、一郎の外见到現われた人種的特性である。「男が見ましても吸付いてみたいほどのうる／＼しい美少年」（三一八頁）である呉一郎の見た目は、正木の診察によって解体され、「あらゆる異人種系統の寄り合所帯」（三二〇頁）と断定される。

①次に、此の少年の骨相の中で、純粋に蒙古人種系統を代表致して居りますのは、素直な、黒い髪の毛の生え際と、鼻の中の内部の形だけであります。此の少年の鼻の穴は、曲りが少なう御座いますので器械で覗きますと一直線に奥までわかる……お笑ひになつてはいけません。これは遺伝学上から申しまして大

切な調査なので、若し白人の系統を引いた鼻の穴だと、恐ろしく曲りくねつて居るので御座います。(三二〇頁)

②然るに、其様な表面的に冷静な性格が、一朝にして心理遺伝の暗示によつて、撃破、顛覆されてしまひますと、今まで内部に潜み流れて居りました大陸民族式の、想像も及ばない執拗深刻、且、兇暴残忍な血が、驀然に表面へ躍り出して、摩訶不思議な大活躍を演ずる事に相成ましたので、つまり只今から御紹介致します空前絶後の怪事件の真相と申しますのは、要するに此の少年の鼻の穴の中に隠れて居りました蒙古人種系統の心理遺伝が、一時に暴れ出したものと、お考え下されば宜しいので御座います。(三二一頁)

引用①は、呉一郎の鼻の形態について述べている。この特性から正木は、引用②にみられるような心理的性格を見出す。一郎には「大陸民族式」の「兇暴残忍な血」が流れており、それが彼の犯罪素質の源であるというのである。モンゴル系統の特性が、見かけでは識別できない身体内部に座を持っているように、呉一郎の心理性格の奥深いところに先祖から受け継ぐ犯罪性が潜在しているという説明である。

さらに正木博士は、犯罪性の起源を中国に求める。唐の玄宗皇帝の御代に活躍した画家、呉青秀がそれに当る人である。呉青秀は、政事をなおざりにする皇帝に欲望の無常さを悟らせるため、美しい女性の肉体が腐敗していくさまを絵巻に写し献上する計画を立てる。はじめは妻の黛を殺しその姿を描いていた呉青秀は、腐っていく女性の姿に性欲を刺激され、以後若い女性を殺しまわるようになる。しかし間もなく、皇帝がすでに王位から退いていたことを知った呉青秀は、黛の双子の妹である芬と日本に逃避し、二人の間に生まれた息子が呉家を成したということが正木の家系調査によって明される。正木博士は「私」に、呉青秀が「病的心理に墮落してゐた証拠」(五七七頁)として絵巻を見せ、彼の犯罪心理を「忠君愛国」³¹を振りかざした「変態性欲」であったと説明する(五八二頁)。

正木は、呉一郎の身体から先祖帰りの証拠を探しているのである。そこで一郎の鼻は、異人種の記号であると同時に、肉体に現われた痛む精神の印として発見される。呉一郎の人種の起源は単一なものとして提示されてはいないものの、彼の犯罪性は、恣意的にも中国大陸という起源を当てがわれる。悪の比喩としての精神病は、正木の精神医学的表象によって異人種のラベルを貼られ、さらに性的過剰のイメージを与えられるのである。

第五節 「僕はキチガヒかも知れませんが日本人です」

呉家にまつわる狂気は、先祖の誤ったセクシュアリティの結果として説明される。正木の精神医学言説に照しだされる中国人は、倒錯と頹廢という逸脱のイメージに結び付く。モヨ子を絞殺したあと病院に収容される呉一郎は、女の死体が埋まっていると言い、正木博士が渡した鍬でひっきりなしに治療場の土を掘り下げる。その姿を観察する正木は、一郎が長い労働に疲れ果てた頃、近づいて何を掘り出そうとするのか、それが埋められたのはいつのことを聞く。

呉一郎に対する正木博士の「解放治療」は、ひたすら先祖の「変態心理」を再現する一郎が、その情欲まで消尽されるほどの「当てなしの労働」（五九六頁）を繰り返すよう放っておき、後から暗示を与えて時間と空間の観念を回復させることである。「解放治療」に関する正木の説明から、呉一郎に対する治療が性欲の処理に関わっていることがわかる。

人間の性慾の刺戟を高める燃料ホルモン……俗に精力と称する内分泌の刺戟液は、激しい労働を続行すると、其方の精力に消耗されて終ふのだからね。そんな性慾の刺戟をダン／＼感じなくなつて、唯、疲れ切つた神経の端々に、一種の惰力みたやうに浮出して来る女の屍体の幻覚に釣られながら、喘ぎ／＼鍬を動かすと云ふミチメな状態に陥つて居る。今まで一切の精神作用を圧倒してゐた変態性慾の怨霊が、消え／＼になつて来たお蔭で、其の下から……あゝ苦しい。遣り切れない。いつたい俺は、どうしてコンナに非道い労働を続けなければならぬのだらう……と云つたやうな、正気に近い意識が次第々々に浮上りはじめた。（五九六頁、傍線は引用者）

正木博士にとって、呉一郎をして犯罪を犯させたこのセクシュアリティの異常は、反復的な身体労働によって相殺できるものと考えられている。しかし「私」はそんな博士の説明は捨置いて、彼なりの推理を試みようとする正木に切り込みはじめる。絵巻を見せた真犯人を探し出し、「狂人地獄に陥れられて、一生涯、飼ひ殺しにされてゐる」（六一四頁）呉一郎の敵を取りたいという「私」に、正木は遂に「……犯人は俺だよ……」（六一八頁）と告白する。ようやく正木は、自分が良心の呵責で一生のあいだ苦しんできたことを打ち明ける。

続いて正木は、最後に残る一つの方策として、今すぐ六号室の少女と病院を出て結婚生活に入ってみることを「私」に勧める。彼は、「私」の自我忘失症が「堅固な童貞生活から来てゐる」ものであるから、少女との新婚生活のうちに「頭の中に

鬱積、緊張して、さうした自家障害を与へて居る其の生理的^[ママ]の原因から解放」されたら自然に過去を思い出さだろうと説く（六七二頁）。性欲を、労働による疲労で消耗させて抑圧することに失敗したのなら、今度は結婚という制度的に容認された形での性交でそれを解消するという提案である。そのようにして思い出された事件の真相を、実験の結果として自分の代わりに発表してくれることを、正木は「私」に懇請する。

しかし、たとえ六号室の少女がモヨ子だとしても、自分が呉一郎であることを覚えておらず、モヨ子と婚礼を挙げる予定の呉一郎がほかにいるかも知れないと考える「私」は、実験を完成させる目的で自身と六号室の少女を結ぼうとする計画に強い抵抗を感じる。それまで萎縮した姿だけを見せていた「私」が、正木博士に向かってはじめて激しく抵抗する瞬間、彼は次のように叫ぶ。

「……ボ……僕は精神病者かも知れません。……痴呆かも知れません。けれども自尊心だけは持つてゐます。良心だけは持つてゐる積りです。……たとひ、それが、どんなに美しい人でありませうとも、僕自身にまだ、誰の恋人だか認める事が出来ない様な女と、たかゞ治療の為に一緒になる様な事は断じて出来ません。法律上、道徳上、学術上、間違ひ無い事がわかつてゐても、僕の良心が承知しません」（六七三―六七四頁）

この姿勢は、正木が六号室の少女をどう思うかと聞いた際、「私」が見せる反応からも窺うことができる。それを聞かれた「私」は、今朝見た彼女の姿に同情以上の気持ちは抱いていなかったことに気づく。続いて美しいとは思わなかったかと聞きなおすと、可哀想とは思つたと応える。しかしながら、正木はこの答えを曲解し「さうだらうとも／＼。美しいと思つたのは、すなはち恋した事だからね。さうで無いといふ奴は似非道德屋……」（五三五頁）と言い大いに頷く。「私」は、「……異性の美しさを感じずる心と、恋と、愛と、情慾とはみんな別物です。そんなのをゴツチャにした恋は錯覚の恋です……異性に対する冒瀆です……精神科学者にも似合はない乱暴な云ひ草です」（五三五―五三六頁）と反発する。この点からすれば、「私」の言う「自尊心」や「良心」は、恋を性欲に矮小化し、性欲をホルモンのメカニズムに還元する機械的思考の反対にある概念であることがわかる。その一方、科学主義は、「忠義」「正義」「義理」「貞操」（一六九―一七〇頁）のような「心」の領域まで解剖してみせる「唯心科学」（六〇五頁）の段階まできていると描かれている。

「私」の抗弁はさらに続くが、ここで重要なのは、「私」の「自尊心」や「良心」が彼の強い民族意識と結びついていることである。

「学術が何です。……研究が何です。毛唐の科学者がどうしたんです。……僕はキチガヒかも知れませんが日本人です。日本民族の血を粟けてゐるという自覚だけは持つてゐます。そんな残忍な……恥知らずな……毛唐式の学術の研究や、実験の御厄介になるのは死んでも嫌です。……学術の研究といふものが、どうしてもコンナ穢らはしい、恥知らずな事をしなければならぬものならば……さうして僕が是非ともコンナ研究に関係しなければならぬ人間ならば、僕はそんな過去の記憶と一緒に、此の頭をブツ潰してしまひます……今……直ぐに……」（六七四—六七五頁）

以上の二つの引用に見られるように、「私」にとっての日本人というアイデンティティは、「良心」という一単語に集約され、「毛唐式の学術の研究」と対立する。この構図は、第二節で考察した作者の探偵小説観に表れていたものではなからうか。「私」は、科学研究を貫こうとする正木博士の対蹠点に立ち、「唯心科学」時代のアウトサイダーを代表するものとして設定されているのである。そのような「私」は、解体されてしまった日本の精神的価値を訴え、科学者に押し付けられるがまま少女と結婚する位なら、いっそ「過去の記憶と一緒に、此の頭をブツ潰してしま」った方がいいと正木博士をなじるのである。

「僕はキチガヒかも知れませんが日本人です」という訴えは、自分を呉一郎として認めることが、民族的に（中国からの渡来人）、衛生的に（遺伝性精神病者）、道徳的に（殺人犯罪者）、理想的な日本人性の枠組からはみ出したものであると是認することとつながるという文脈に照らすことで理解できる。この言葉はすなわち、模範的な「国民」としての資格を否定されてはいるものの、みずからがそれでも日本人であるということだけは意識しているという他者の自己主張である。

言ってみれば『ドグラ・マグラ』は、夢野久作の文明観を具体化してみせるディストピアの虚構である。過去を根こそぎ忘れていても、日本人の自覚だけは持つていう「私」は、「科学文化の外観を掻き破つて、そのドン底に萎縮し藻掻いてゐる小さな虫のやうな人間性」を暴露するという、作者の「探偵小説の使命」を果たすために創造された人物である。遺伝管理によって国民の心理を矯正しようとするマッド・サイエンティストの野心と、それを現実に移すために生まれ、やがて実験の犠牲となる怪物が叫ぶ「良心」。強力な父権に象徴される優生学的民族改良の構想に、弱者の息子が対抗言説として押し出すのは、「日本民族」の「良心」と

いう、「法律」「道徳」「学術」のどこにも依拠しない、精神性としての民族アイデンティティである。この場面において「私」は、テキストの主題を代弁する役を充分につとめているといえよう。

しかしながら、正木に対するこの抗議は、「私」に自分が呉一郎でないという確信がある限りにおいてのみ可能なことであろう。テキストのメッセージが読者に伝えられた後、この物語はどのように括られているか。

「私」が正木博士の提案を激烈な言葉で拒んだ後、博士は何も応えずに研究室から姿を消してしまう。一人で研究室に残った「私」は、もしやと絵巻を開いて見はじめる。その絵巻の最後に呉千世子が書き残した文章を発見し、一郎の父が正木博士であることを知った瞬間、「私」は錯乱状態で病院の外を彷徨し、誰もいない研究室に帰ってくる。この時の研究室は長いあいだ放置されたかのように薄い埃を被っており、「私」の時間の感覚が現実に戻ってきていることを知らせる。そこで「私」は、自身が周りの人々を危める「稀有の狂青年」「冷酷無残な精神病患者」の呉一郎であることを悟るのである。

……お……オゝ……私が……アノ呉一郎……………。(略)

……おゝ……おゝ……………。

……私は親を呪ひ、恋人を呪ひ、最後に見ず識らずの男女数名の生命までも奪ふべく運命づけられた、稀有の狂青年であつたのか……………。

……死んだ父親の罪悪を、白昼公然と発き立てゝゐる、冷酷無残な精神病患者であつたのか……………。(七三四頁)

僅かのあいだ、自身を取り囲む現実に気づく「私」は、最初聞いたものと同じ時計の音とともに忘却の状態に落ちていく。この後も「私」はまた、ある夜に目を覚まし、今日のような経験を繰り返すであろうことを暗示する結末である。それを自覚するとき、「私」は病室の壁に頭をぶつけ自殺を試みるが、同時にそれは、テキストの最初にある「胎児よ/胎児よ/何故躍る/母親の心がわかつて/おそろしいのか」という巻頭歌と照応することによって、全ては胎児が子宮の中で夢を見ていることのようにも解釈できる。その際「私」の前に現われる幻覚は、呉青秀の顔である。

その瞬間に私とソツクリの顔が、頭髮と鬚を蓬々とさして凹んだ瞳をギラ／＼と輝やかしながら眼の前の暗の中に浮き出した。さうして私と顔を合はせると、忽ち朱い大きな口を開いて、カラ／＼と笑つた……が……

「……アツ……呉青秀……」

と私が叫ぶ間もなく、掻き消すやうに見えなくなつてしまつた。
……ブウウウ……ンン……ンン……ンン……。 (七三八頁)

初版『ドグラ・マグラ』の函にみられる惹句には、「神秘を極めたこの変態的悪血とは何を意味するのか」という問いかけの文章がある。これに対する答えは、自分が呉青秀の後裔、つまり呉一郎であることを悟る「私」の独白によって提示される。「私」が狂人の呉一郎であり、その遺伝的犯罪性は中国から渡来したものであるという設定は、正木博士が自分の罪を悔やんで自殺を遂げた後にも依然として残るのである。この事をまだ知らない間は、「私」は無垢な疎外者として作者の腹話術人形の役割を果たすことができた。しかしこの精神病患者の表象は、表現者の外部にある他者として、境界線の外に再び追い出されなければならない。その境界をつくるのは、狂気という不徳の病であり、その上に重ねられた異人種という差異の記号である。

第六節 むすびに一進化すべき民族心理の実験場としての解放治療場

本稿では『ドグラ・マグラ』が、精神病患者の呉一郎を主人公にしている点に着目して分析を試みた。本テキストは、「私」が自分の意識に映された主観的経験を言語化した構成を持っており、それは精神病患者の芸術が評価されつつあった同時代の傾向を反映したものと考えられる。この点を考え合わせれば、「変格探偵小説」を「芸術の守護神を冒瀆」する「反逆芸術」(第二節を参照)と考えている夢野久作が、精神病患者を語り手とする『ドグラ・マグラ』を思い付いたのも自然な成り行きであったと考えられる。そしてこのテキストにおいて、正木と若林が呉一郎の臨床実験を行う解放治療場という仮想空間は、作者と読者との間で、生き残るべき民族心理を探求する実験場として再構成されるのである。

二人の科学者によって犠牲にされる呉一郎の造形は、テキストの主題を代弁する役割を担わされる。「僕はキチガヒかも知れませんが日本人です」という彼の絶叫は、西洋発の科学主義に威嚇される日本の精神性を訴える台詞である。ただしこの訴えでは、優生学と精神医学を通して己れを他者化するイデオロギーを、正面から批判することはできなかつたといえよう。なぜなら、国民性の生物学的画定も、その反対概念として抽出された民族意識の主張も、国民性の根拠をどこに見出すかをめぐる言説の場に参与することによって、根底においては両方とも、ナショナリズムのイデオロギー編成の一部を織りなしていたにすぎないからだ。

ここで「前衛」³¹⁾の役を受け持つ「私」は、中国人の末裔として設定されており、

それは、犯罪を犯す精神病患者というもう一つの設定を、外部から由来するものとして日本人の境界から排除し、悪を外部化する効果を持つ。「私」が「日本人の良心」を唱えてからも、一郎の狂気は否定しえないものとして残余するのではないだろうか。自己を日本人であると信じ、日本人に相応しい民族的矜持を持つことを主張するこの中国人の後裔は、その使命を果たしてからは自分が、「親を呪ひ、恋人を呪ひ、最後に見ず識らずの男女数名の生命までも奪ふ」犯罪者であるという残酷な事実を確認させられるのである。悪の外來說という修辞を使うのは、作中人物の正木博士だけではない。

注

- 1 本名杉山泰道。一八八九—一九三六。福岡県福岡市で生まれた。一九二六年『新青年』懸賞募集に短編「あやかしの鼓」が二位に選ばれ、探偵小説家としてデビューした。この時期すでに着想されていたとされる代表作『ドグラ・マグラ』は、およそ十年間の執筆と推敲を経て完成された。夢野久作の生涯については、西原和海編『夢野久作の世界』（沖積舎、一九九一年）、七二—九四、一七—一八三、二一—二二六七頁を参照のこと。
- 2 本論稿では、一九九五年、中積舎刊行の復刻版を底本とする。なお、本論稿中（ ）の数字はこの版からの引用ページ数を示し、[] は引用者による注を示す。本稿の引用には、差別言語が多数使われているが、原文の表現を優先するためそのままとした。了承を願いたい。
- 3 「エロ・グロ・ナンセンス」とは、エロチック・グロテスク・ナンセンスの縮約語として、一九二〇年代中期から四〇年代初期にかけての大衆文化の性格を表す言葉である (Miriam Silverberg, *Erotic Grotesque Nonsense ; The Mass Culture of Japanese Modern Times* (Berkeley and Los Angeles : University of California Press, 2007), 29—30)。
- 4 一九世紀中葉、環境によって人間種が変質を被り、それが遺伝によって悪化した結果として精神病を理解するモレル (Bénédict Augustin Morel, 一八〇九—一八七三) の変質学説以来、精神病の主要な原因として遺伝が取り上げられるようになる。この認識は一九世紀末、社会ダーウィニズムの影響によって支配的なものとなり、二〇世紀前半にかけて優生学的処置が模索されるようになる (大俣和一郎『近代精神医学の成立—「鎖解放」からナチズムへ』(人文書院、二〇〇二年)、一〇七、一四七—一五五頁)。なお、日本の精神医学と優生思想の関係については、同書、一六二—一七〇頁および、橋本明「わが国の優生学・優生思想の広がり」と精神医学者の役割—国民優生法の成立に関連して」、『山口県立大学看護学部紀要』第一号 (一九九七年三月)、一—八頁を参照した。
- 5 優生学の概括と研究史の流れについては、松原洋子「優生学の歴史」、『生命科学の近現

- 代史』廣野喜幸・市野川孝孝・林真理編（勁草書房、二〇〇二年）、二〇〇―二二六頁を参照した。優生学の歴史については、ダニエル・J・ケヴルズ『優生学の名のもとに―「人種改良」の悪夢の百年』西俣総平訳（朝日新聞社、一九九三年）や、スティーブン・トロンブレイ『優生学の歴史―生殖への権利』藤田真利子訳（明石書店、二〇〇〇年）を参照した。
- 6 一九三〇年代における優生学の大量宣伝と制度化への実践については、鈴木善次『日本の優生学』（三共出版、一九八三年）、藤野豊『日本ファシズムと優生思想』（かもがわ出版、一九九八年）を参照のこと。
 - 7 法医学者、犯罪人類学者。一八三五―一九〇九。モレルの変質学説に着眼した「生来性犯罪者」説を主張した（中谷陽二「ロンブローゾ」、『現代精神医学事典』加藤敏〔ほか〕編（弘文堂、二〇一一年）、一〇九四頁）。
 - 8 Cesare Lombroso, *L'uomo di genio* (Torino: Bocca, 1894). 日本における『天才論』の最初の抄訳は、『天才論』畔柳都太郎訳（普及舎、一八九八年）である。一九一四年には、辻潤による全訳『天才論』（植竹書院、一九一四）が出版された。
 - 9 精神医学者。一八八六―一九三三。ヨーロッパ各地から五千枚に及ぶ患者の作品を蒐集し、表現精神病理学を切り開いた。精神病者の造形から文明に抑圧されない原初性を認め、小児や未開人の表現との共通性を主張した（中谷陽二「プリンツホルン」、『現代精神医学事典』、同上、九二八―九二九頁）。
 - 10 Hans Prinzhorn, *Bilderei der Geisteskranken* (Berlin: Springer, 1922).
 - 11 日本における『精神病者の芸術性』の受容については、大内郁「日本における一九二〇～三〇年代のH.プリンツホルン『精神病者の芸術性』の受容についての一考察」、『千葉大学人文社会科学研究』第一六号（二〇〇八年三月）、六六―七九頁を参照した。
 - 12 精神病理学者。一八九八―一九六五。一九三一年雑誌『アトリエ』にゴッホの伝記を連載して文筆家として知られはじめ、ゴッホの精神病理学的研究書を標榜する『ファン・ホッホの生涯と精神病』（聚楽社、一九三二年）を出版する。一九三六年、日本ペンクラブにその名を借った科学ペンクラブの刊行誌『科学ペン』の創刊と編集に加わり、精神病者の絵画やハンセン病患者の文学について積極的に発言した。画家山下清（一九二二―一九七一）の紹介者としても有名（大内郁「日本における一九二〇～三〇年代のH.プリンツホルン『精神病者の芸術性』の受容についての一考察」、同上、六六―七九頁）。
 - 13 「精神分裂病（症）Schizophrenie」は、「早発痴呆（Dementia praecox）」に代わる分類として一九一一年ブロイラー（Eugen Bleuler、一八五七―一九三九）によって提案された。日本では一九三七年、日本精神神経学会で「早発痴呆」に代わる病名として採択される。二〇〇二年、「統合失調症」に病名が変更された（佐藤光源「精神分裂病」、『現代精神医学事典』、同上、六〇三頁）。

- 14 式場隆三郎「二笑亭綺譚（上）」、『中央公論』第五二卷一〇号（一九三七年一月）、四四七頁。
- 15 式場隆三郎「二笑亭綺譚（下）」、『中央公論』第五二卷一〇号（一九三七年一月）、三九五頁。
- 16 「変格探偵小説」は、謎解きを主眼とする「本格」以外の探偵小説を差別化するために一九二五年頃から使われはじめた造語である。（新保博久「変格」、『日本ミステリ事典』権田満治・新保博久〔ほか〕監修（新潮社、二〇〇〇年）、二七九―二八〇頁）
- 17 夢野久作「甲賀三郎に答う」、『ぶろふいる』第三卷一〇号（一九三五年一月）、一〇八頁。
- 18 夢野久作「探偵小説の真使命」、『夢野久作全集7』（三一書房、一九七〇年）、三六五頁。『文芸通信』（一九三五年八月）に発表。
- 19 夢野久作「甲賀三郎に答う」、同上、一〇七頁。
- 20 たとえば、百川敬仁は、『ドグラ・マグラ』が「日本文化の在り方」を問うている作品であると指摘し、「探偵小説の真使命」の記述に照らし合わせて、この作品における「良心」が「墮落した文化と対決しそれを克服して行くための抛りどころとして、もっと深く強力なものへ育成さるべきものである」と述べている（百川敬仁『夢野久作一方法としての異界』（岩波書店、二〇〇四年）、一八九―一九五頁）。また、呉一郎が自動人形化された身体のイメージで描写されている点に注目し、この作品を「機械的不気味（mechanical uncanny）」の表象を通じて昭和初期の「機械の時代」を異化してみせるテクストとして解釈するNakamuraも、久作の探偵小説観から近代日本における西洋科学の覇権と危機に瀕した日本文化という対立構図を読みとっている（Nakamura Miri, “Horror and Machines in Prewar Japan: The Mechanical Uncanny in Yumeno Kyusaku’s *Dogura magura*,” *Science Fiction Studies* Vol.29, No.3 (2002): 366–381）。
- 21 夢野久作「探偵小説の真使命」、同上、三六六頁。
- 22 夢野久作「探偵小説の真使命」、同上、三六六―三六七頁。
- 23 類似療法は、ドイツのC・F・S・ハーネマンによって創始された治療法である。同毒療法とも呼ばれ、世紀転換期に広く流行した医学議論であった（サンダー・L・ギルマン『性の表象』大瀧啓裕訳（青土社、一九九七年）、三五九―三八一頁）。
- 24 夢野久作「探偵小説の正体」、『ぶろふいる』第三卷一〇号（一九三五年一月）、一三四頁。
- 25 芹沢一也『＜法＞から解放される権力―犯罪、狂気、貧困、そして大正デモクラシー』（新曜社、二〇〇一年）、八五―一四二頁。
- 26 精神科医。一八八七―一九四九。東京帝国大学医学部助教授、松沢病院副院長を務め、一九三一年名古屋大学医学部教授に就任した（日外アソシエーツ編「杉田直樹」、『二〇世紀日本人名事典 あ～せ』（日外アソシエーツ、二〇〇四年）、一三四〇頁）。

- 27 杉田直樹『優生学と犯罪及精神病』（雄山閣、一九三二年）、二〇四頁。
- 28 杉田直樹、同上、二〇四―二〇五頁。
- 29 川村邦光は、一九二〇―三〇年代のメディア報道にみられる見出しの例をあげ、日常に潜在する異常を表象するキーワードとして、「猥奇」がスクランダラスに消費されていく過程を紹介している（川村邦光「日常性/異常性の文化と科学―脳病・変態・猥奇をめぐる」、『編成されるナショナリズム』（岩波講座 近代日本の文化史5）小森陽一〔ほか〕編（岩波書店、二〇〇二年）、一〇六―一一六頁）。
- 30 サンダー・L・ギルマン『病気と表象―狂気からエイズにいたる病のイメージ』本橋哲也訳（ありな書房、一九九六年）、四八―五四頁。
- 31 「忠君愛国」は、初刊『ドグラ・マグラ』では「××××」（五八五頁）、「×君×国」（五八八頁）のように、伏字で表記されている。
- 32 一九二〇年代にプロレタリア文学・芸術運動の陣営で階級闘争を率いる主体とその人々の手による作品を表す意味で使われていた「前衛」は、消費する主体としての「大衆」の登場に直面し、一九三〇年代にはモダニズムの類義語としてその外延を広げることになる（波瀾剛『越境のアヴァンギャルド』（NTT出版、二〇〇五年）、二六―四七頁）。